

## 私の学生時代そして――

M⑬ 木本恭司

### 1. まえがき

私が機械工学科に入学したのは昭和36年で、入学手続きなどを終え、最初のガイダンスなどは西代の学舎であった。校舎はお世辞にも立派とは言えず（はっきり言えばボロ）、えらいところに入學したと後悔したのを良く覚えている。実際には西代の学舎に行ったのはそのとき一回きりで授業が始まると御影で教養時代を過ごすことになった。

この一文は落ちこぼれ？の私の学生時代およびその後の工学部助手時代から現在に至るお詫びの意味も込めた懺悔録でもある。

### 2. 学生時代

御影で過ごした教養時代は60年安保の学生運動の残り火がまだ残っており、その後の全共闘運動に繋がる時代であった。学内のそうした雰囲気の中で歌声サークルに入り、共感を持つようになっていた。講義にはあまり出ず、本ばかり読んでいた。系統的なものではなく、手近にあるのを乱読していたように思う。1年半過ぎて六甲台の専門課程に進級したが、そこはまだ新しく作られたばかりで私達13回生は新学舎2年目の学生であった。

もともと就職に有利そうだという理由だけで機械工学科を選んだ私にとって専門の講義に興味を持てるはずが無かった。当時の日誌をみると（日誌は今72歳にいたるも時につけている）、ボルトとかナットとかの製図、何でこんなことをやらんといかんのだろうといった意味のことが書かれており、真剣に転部を考え兄とも相談していた。相変わらず講義には出ず、工学部自治会執行委員として工学部も含めた全学封鎖に加わったりもしていた（赤川先生からは学舎は新しいので、廊下にビラ貼らないで欲しいとの要請があったよう）。

進藤先生の材料力学など一連の材料に関する力学の講義は当時プリントですべて行われ、演習課題も個々に異なる課題が与えられた。講義をサボってばかりいたのでやむなく、研究室までプリントを貰いに行っていた。何回も行くので、そのうち名前を覚えられてしまったが、私がいまだにすごいと思っているのは、一度も「講義にでておきなさいよ」と言われた記憶が無い点で（仕事中に研究室まで押しかけてこられ、プリントを手渡すのは結構面倒な作業―逆の立場にたってみて初めてわかったこと―）、自主性を尊重し、学生を一人の大人として扱っておられたのだなと大学のあるべき姿を感じている。

講義をきちんと受けていてもなかなか試験で合格点を貰えないのに、そんな態度で合格するはずもなく、追試を良く受ける羽目になっていた。材料力学か弾性学か科目名は忘れたが、2回、3回の追試で最後は卒業時期近まで続いた記憶がある。4章でふれるがこれは大変面倒なことで、この経験が私の教員時代のバックボーンになっている。

### 3. 工学部助手の時代

専門の各講義になじめなかった私も熱力学には興味をもって講義に出ていた。多分熱力学が他の機械系科目に比べて特殊な位置一時に哲学的であったからかも知れない。4年になって、当時の五講座故松本隆一教授の下で卒業研究を始めることになった。先生も神戸大での卒業研究生の担当は2回目であった。テーマは「単室燃焼室中の燃焼に関する研究」で実験してみると、条件により低周波の振動燃焼が発生し、これ一体何？と驚いた。

研究に少し興味を覚え始めていた私は成績が大変悪いにも拘わらず、当時設立後2年目であった大学院修士の入試を受けてみることにした。曲がりなりに受かったが、母親と2人で厳しい生活を余儀なくされていたので、正直のところ進学するかどうか迷っていた。その時に松本先生から今講座助手を捜しているとの話を聞きつけ厚かましくも願い出た。先生の恩情で拾って頂き（今も足を向けて寝ることができないと思っている）、その後、約3年にわたって給料を貰いながら大学院生と同じ生活ができ、その間多くの知己もできた。また、若い頃の坂口先生には友人数人と王子動物園へご一緒するなど良く遊んで頂いた。現在も時には東京から我が家に宿泊して一緒に文化財巡りをする親友もおり、またこの頃一緒に過ごした五講座の同窓生（13-15回生）のみの同窓会が2年に一度の割合で現在も開かれている。

一方、研究の方では、最初驚いた現象がヘルムホルツ型の振動現象とわかり、簡単な解析を加えて、機械学会論文集に投稿したところ幸いに accept され、これが私の最初の論文集への掲載論文となった。若い時代に得たこれらの経験およびその頃親交のあった友人がその後の人生および人生観を大きく変えていったと今は思う。

### 4. 旧大阪府立工業高等専門学校（現大阪府立大学工業高等専門学校）の教員時代

昭和43年にある方の紹介で旧大阪府立工業高等専門学校にお世話になることとなった。担当科目は熱力学、伝熱工学、エネルギー工学などなどであった。工業高等専門学校（高専）は中学卒業後入ってくるので、出欠 check が特にやかましく、学生時代とは一変して欠席が多い学生には個別に注意するなど高専の先生役に徹していた。熱力学は特に難しいと感じる学生が多く、試験でも合格できない学生が結構おり、そのため追試を行っていた。先生稼業というのは、授業準備もあり、会議もあり、学生の相手および卒研生の相談にも乗らねばならず、大変忙しいのに問題づくりなどで「何でもまた余計な仕事を！」と思ったものである。そのときによく思い出したのは進藤先生のこと、学生と適当なところで妥協するということはしないという学問に対する姿勢であった。気がついてみると、私も追試問題作成など何度も学生の面倒をみる羽目になっていて昔を思い出しては苦笑したものである（余談であるが、先生には神戸大学退官後の大阪電通大学教授時代に学舎が近くにあったことから熱力学の非常勤に呼んで頂いたりしていた）。この時代に、機械学会誌(1998 Vol.101 No.960)に「高等専門学校における技術者教育」として特集号の編集に取り組んだのとコロナ社から主として高専生向けの教科書シリーズの出版依頼があり、主に関西地区の高専の先生方と「機械系教科書シリーズ(全27巻)」を出版したのが忘れられない。最後の出版は2012年で最初の出版(2000年)から12年の歳月を要している。この時期はとにかく忙しく、小脳梗塞で仕事に倒れ、シリーズ刊行のことばも入院先で添削する羽目になっていた。

## 5. そして今——

平成 18 年に府立高専を退職し、府立高専、龍谷大、近畿大などで非常勤講師を勤めていたが、4 年前から「機械学会関西支部シニア会」の運営委員として、小学生向けの理科工作教室の各地での開催をお手伝いしている。地元大津市でも今年は 3 つ目の教室を立ち上げたいと画策中。大津市がいじめの問題ばかりクローズアップされるのは悔しいとの思いが背景にはあります。また、趣味として始めた「びわ湖よし笛」にはまっており、地元を中心にそのすばらしさを知ってもらおうべく活動を開始したいと思っています。

## 6. あとがき

先日の第 2 回座談会では、助手時代に若い時代をともに過ごした何人かの方と再会する事となり、懐かしくもあり、現状の確認もでき、大変有意義な時を過ごせた。また、懇親会では「よし笛」も聞いて頂いた。幸い好評であったようで、坂口先生からは録音して送れとの命で初めての事なので四苦八苦、やっと済んだと思ったら、「学歌」をよし笛録音して送れとのことで、このような企画をして頂いたお礼の意味で時間をかけてこれから取り組みたいと思っています（私の卒業後に制定されたようで聞いた事もない）。

なお、進藤先生とはシニア会の各種催しで現在もご一緒することが多く、一番ご年配であることが殆どなので、懇親会での乾杯の音頭取りなどをよくお願いしています（毎年、奥様とお二人で海外旅行されている写真の入った年賀状を頂いている。また、ジョギングですでに地球一周分走られたとか。敬礼！！）。

（ 終 ）

寄稿日：平成 27 年（2015 年）1 月 16 日 座 02-03